●事　例●

聖徳大学短期大学部保育科における学生支援

「All For One」（教職員全員が学生一人ひとりに向かいあうこと）体制の醸成とインテーカーサポートの効果

野原　八千代
（聖徳大学短期大学部教授）

学生生活支援の特徴として、大学入学前まで個々人が歩んできた道のりを踏まえて相談にのることが特に必要な学生が多くなっている。それは、近年の相談に来る学生の特徴として、自己の位置づけが不安定であり、家族関係の問題を抱えていることが多いからである。その中には心の病と向き合いながら修学を進めている学生もおり、カウンセラーや精神医との連携が必要な場合も少なからずある。

今までに寄せられた相談内容の多くは、学科の適性、人間関係、勉学への意欲・不安、進路の問題、家庭の問題、経済的問題など多岐にわたるが、相談内容の背景に上記の問題が隠れている場合も少なくなく、本質がその部分にあることもある。

また、自己の問題を自覚していない漠然とした不全感を抱えた学生や、自発性が乏しく受動的な学生も多く見うけられる。日常的なかかわりを通じて教職員が問題を拾い出し早期に適切な支援をすることが必要である。

本学の場合、クラス担任制をとっており、一次相談者はクラス担任となることが多く、担任に寄せられる相談が最も多いが、「担任と合わない」「相談したい時にいない」などの学生の声も聞かれ、以下に述べる「All For One」のサポート体制が考えられた。一次相談者が担任でも教職員であっても、相談の解決に向けては、問題を発生させてい

る要因の分析、解決のために最良と考えられる道筋の確保が必要であり、相談体制の質の向上のためには、教職員全体の相互理解、問題解決に向けてのスキルを身につけることである。

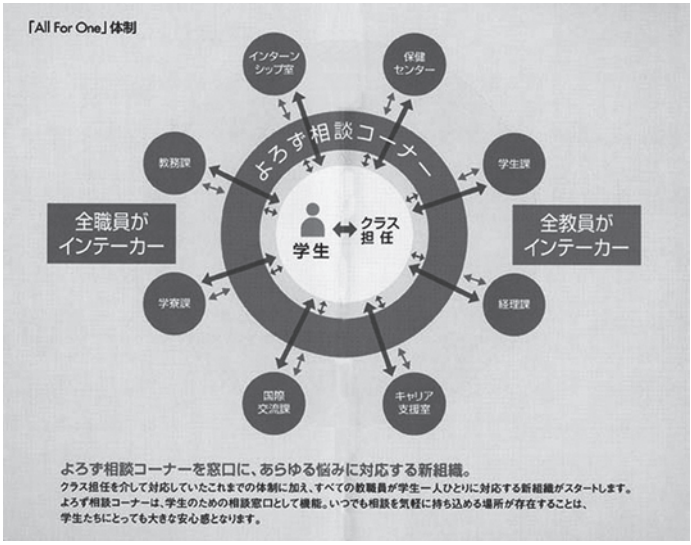
〈全教職員によるインテーカーサポート〉

一　取り組み概要

（一）「All For One」（教職員全員が学生一人ひとりに向かいあうこと）体制の理解とそれに必要なスキル向上のためのインテーカー講習会を実施した。今回の対象者は、保育科全教員と大学・短期大学部の全職員である。他学科の教員は参加していない。

実施主体の保育科にはよろず相談コーナーが設けられ、その隣室にオープンスペースとしてみんなの広場が設けられた。よろず相談コーナーには、一日を三つの区画にわけ、授業等に支障を来たさない形で保育科全教員が担当した。

（二）また今回の講習会では、実施主体である保育科について、全職員に保育科の学生短大二年間の学びの流れを、学事日程とともに説明した。二年間で、幼稚園教員免許二種と保育士資格を取得することがいかに大変であるかとともに、保育科学生の特有の悩みについて話し理解を得られた。



（図）

二　よろず相談コーナーでうけた悩みの内容

進路・就職の問題、授業に関すること、寮生活、人間関係、不安などがあるが、相談までは至らないが、話すことで心の安定を求めたり、自分の行動や判断を確認するといった内容が散見された。クラス担任への相談事項、またよろず相談コーナー以外でクラス担任以外の教員が受けている相談にも同じ傾向がみられる。

保育科で開いたよろず相談コーナーであったが、他学科の学生が訪れ相談するケースも見うけられた。

三　効果

今回の取り組みで一番効果的であったのは、インテーカー講習会を実施したことである。インテーク、アセスメント、コーディネーションの三つの道筋とその基本を知ることで、どこまでかかわるのがよいのかある程度の示唆があり、教職員側の不安も少なくなり相談を受けやすくなった。教職員の学生相談のあり方には大きな変革があったと推察される。インテーカー講習前後で実施したアンケート調査から変容を伺わせる記述がみられている。

四　現在の状況

よろず相談コーナーの相談件数がさほど多くなかったこと、新たな取り組みが保育科で開始されたことをふまえ、現在はよろず相談コーナーを一次的に閉鎖し状況をみている。

相談件数が増えなかった背景には、インテーカー講習を受けたことにより、相談を受ける側の姿勢の変化がおき、以前以上にいつでもどこでも相談をうける体制ができたことが要因の一つであると考えている。また、クラス担任は必ず個別面接を実施することになっているが、担任が指定した個別面接以外の時に相談で来室した学生に対し、迎える姿勢、話を聞く姿勢が変わったと自覚する教員も少なくない。

一方で、ほとんどの学生が二年間で幼稚園教員免許二種と保育士資格を取得することから授業が詰まっており、相談に訪れる時間が少ないという要因もあろう。

よろず相談コーナーの隣室に設置されたみんなの広場には、学生が集まる機会が増え、学生間での情報交換、教員から学生へのメッセージの掲示、またそこに教員が顔をだすことにより、小さな相談はその場で受けているという状況も出てきている。

五　今後の展望

インテーカー講習の効果は大きいと判断され、新入教職員へ行うことは効果的であると判断される。また、数年に一度再受講をする必要がないかは検討すべきである。

保育科におけるよろず相談コーナーに他学科の学生が相談に訪れるケースもあり、大学全体としては半オープンスペースでの相談コーナーがあれば相談件数は増える可能性はあると判断している。

次に各学科（短大、学部含めて）それぞれに特徴がある。入学から卒業までの各学科、各コースの二年間、四年間の学生生活のサイクルを共有する機会があれば、教員が他学科の授業を担当していく場合に役立つであろうし、職員の学生支援の参考になりうる。

保育科の現状は、インテーカーとして相談にのるだけでは十分な学生支援ができなくなってきている。その理由として学習意欲の低下、知識、理解力の不足、考え抜く力、前に踏み出す力の欠如など、学習に直結したことで自信を失い、方向性を確信できない学生が増えているからである、今後は精神的なサポートとともに学習意欲を高めモチベーションをあげていく支援を同時にしていくことが必要と考えられる。このことは、キャリア教育にいわれている就業力にもつながるものと考えられる。

六　保育科の現在の新しい取り組み

よろず相談コーナーおよび教員への相談内容として授業以外で進路・就職の問題、寮生活、人間関係、不安などをあげたが、これらの相談内容は大学入学の本来の目的である学びと直結している内容が少なくない。学習意欲の低下、知識、理解力の不足、考え抜く力、前に踏み出す力の欠如などの諸課題の克服が、学生生活の支援には欠かせないと判断される。そこで新たな取り組みとして異学年共同コミュニティによる課題解決型学習プログラムを平成二一年より開始した。短大一年生と二年生が異学年コミュニティを形成、教員がファシリテーター役となり、少人数指導により学生の主体的な学びを推進する教育プログラムである。異学年の学生同士、学生と教員間の双方向型学習を可能にするとともに、コミュニティごとに学習テーマ、活動内容、成果発表方法を決定し、実践することで幅広い学びの保証をはかる。多様な人間関係の中で、自らを考え、行動していくことで、学びの質とともに、課題発見力、行動力、傾聴力、自己表現力の向上させることを目的としている。現在進行中であり、初年度の効果では対人関係の調整の仕方

に変化がでてきている。異学年コミュニティは、クラスにこだわることなく学生が申し出たテーマごとにコミュニティを形成している。現在の二年生（昨年の一年生）のリーダーシップのもとに、二年度目が展開されており、学習意欲の変化、考え抜く力、前に踏み出す力に変化が多少なりとも出てくることが期待される。

〈インテーカー講習会の概要〉

一　「All For One」（教職員全員が学生一人ひとりに向かいあうこと）体制の目的。

二　学生相談について

　カウンセラーが行う学生相談との区別、教職員の行う学生相談の特徴と教職員の行う学生相談のメリットとデメリットについて話されている。また本学は学部と短大が同じキャンパスにある女子大であり、女子学生の心理的特徴、短大生・学部生の心理的特徴、学生生活のサイクルと心理的特徴の理解について講義がなされた。

三　インテークについて

四　インテーカーに必要なスキル

　カウンセリング・マインド、アセスメント、コーディネーションについて

五　インテークの実際と配慮が必要な学生について

　ロールプレイを含めて実施

六　保育科の特徴の理解と保育科学生の特有な悩み

七　学生の健康

　以上が今回保育科で実施したインテーカー講習会の概要である。

まとめ

「All For One」（教職員全員が学生一人ひとりに向かいあうこと）のサポート体制は全教職員の学生支援意識の醸成を引き出すものである。全教職員のインテーカー講習会はその意識を維持していくのに役立つであろう。

　保育科では、現在学生支援のために二つのプログラムが実施されている。よろず相談コーナーは、現在取り組み始めた教員ファシリテーターによる課題解決型プログラムの展開が落ち着いた後、多少の実施方法に変化はでると思われるが、保健センターに結びつき疾患の早期対応ができた例もあり、全学的な取り組みとして、保育科から発信し他学科、保健センターと話し合いの上再開したいと考えている。